

現代フランスにおける医学哲学の展開

——ドゥブリュ、グルメクを中心に——

金森 修

この夏に話すことをいま決めろと言われても、少し困りました^{*}。私は何ヶ月も後の話を決めてしまうほど、固定的なやり方で仕事をするのではないからです。なので、できる限り大枠の概括的なテーマを提示しておき、実際に話すときには、以下で述べるよりももっと、或る特定の話題に絞って話すことになるかもしれません。

周知のようにフランス系の認識論(*épistémologie*)は、認識論とはいっても、抽象的に、妥当な認識一般の成立の根拠を探るといった作業を主とするのではなく、或る個別科学の歴史的展開を具体的に見据え、その個別事例の概念装置群が住み着く地平に身を置いた上で、概念地平の輪郭を浮き彫りにしたり、輪郭全体の流動化の契機と根拠を探ったりといった作業を主に行います。その場合、それは、個別科学の歴史的記載と大幅に重なりをもつために、一見、科学史の議論をしているのか、認識論の議論をしているのかが不分明になるという特徴を持っています。

私はエピステモロジーを長らく孤軍奮闘状態で行った後で、孤独な作業に疲れ果て、一時期サイエンス・ウォーズなどの科学社会学的動向にも目配りをしてきました。しかし、所詮、人は若い頃の経験の呪縛からはなかなか逃れられるものではなく、最近また、エピステモロジーの周辺をうろついています。今回の総題は「認識論」だということですが、エピステモロジーに関わってきた者として、上記の特性をそのまま受け継ぎ、個別具体的事例に則した知識分析を行いたいと思います。これまでの私の主要な関心との繋がりもあるので、その個別科学としては医学を取り上げます。それも、(一瞬思い至った十九世紀初

頭の生氣論論争史はこの際諦めて) 20 世紀後半に絞ります。ただ、その場合普通取り上げられるカンギレム(G. Canguilhem)やダゴニエ(F. Dagognet)は、既に邦訳等もあるので、或る程度は既知のものと見なします。もちろん、一定の総括はするつもりです。カンギレムはまだまだ学ぶべきものはあると思いますが、ダゴニエは、そのいくぶん単純な自然主義が鼻につきます。ともあれ、この二人については簡単に触れるだけにします。そして、今回は、せっかくですので、後一步踏み込んで、我が国ではまだ比較的知られていない二人の学者(最終的には、そのどちらかだけになるかもしれませんが)を取り上げたいと思います。クロード・ドゥブリュ(Claude Debru)とミルコ・グルメク(Mirko Grmek)の二人です。グルメクの方は医学史家といった方が正しいかも知れません。しかしその作業のなかでの哲学的分析に焦点を当てられるのなら、そうしたいと考えています。

そして、もし話がうまくいけば、そもそも「医学哲学」なるものは成立しうるのか、成立するとすれば、それはどのような意味に於いてなのか、といった問題群についても、私なりの見通しを述べることであれば良いとは思っています。でも、実質的には 30 分程度の時間しかないので、無理そうな感じはしています。ですから、この最後の点はおぼつかないとはしても、上記二人だけではなく、それ以外にも、重要と思われる学者がいれば簡単に言及し、概略的に、現在のフランス医学哲学の状況がつかめるような話になれば、一応の目標は達せられた、と考えます。おそらく、皆さんが普段研究されている話題とは相当ずれると思いますが、その分、きっと好奇心もお持ちのことと思います。活発、かつ闊達な議論を期待しています。

(かなもり おさむ／東京大学)

* 編註：金森先生にはこの草稿を 2004 年 12 月の時点でお寄せいただきました。